

【第 I 部 死者もまた生きるのだ——革命の熱気と混乱】

解説：小宮正安

《第九》という呼称で知られるベートーヴェンの《交響曲 第 9 番》。その成立に関しては紆余曲折があり、1815 年頃にスケッチ帳に萌芽が現れた後、1817 年にロンドンのフィルハーモニック協会から新作交響曲を委嘱され、実際の作曲が始まる。ただし、同時期に大作《ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）》の作曲に取り組んでいたこともあり、曲作りが本格化したのは 1822 年以降であり、全曲が完成したのは 1824 年のことだった。そして同年 5 月 7 日、彼の本拠地であったウィーンのケルトナー門劇場で初演がおこなわれた。

いずれにしても《第九》は、器楽曲であるはずの交響曲に声楽が導入されている点も含め、空前絶後、演奏至難の作品として、なかなか全曲上演の機会に恵まれなかった。そうした状況の中、当作品の普及に尽力した 1 人が、ベートーヴェンを崇拝していたワーグナー（1813-83）。彼は 18 歳を迎えた 1831 年に当作品をピアノ独奏用に編曲し（第 4 楽章は声楽も入るようになっている）、曲の普及に努めた。

なお《第九》は、ベートーヴェン作品の代名詞のように言われる「闘争を経て勝利へ至る」典型的な一例である。特に**第 1 楽章**は文字通りの闘いの音楽であり、しかもその終結部には、闘いに斃れた存在に捧げる葬送行進曲のような楽想すら現れる。だがこうした曲の世界は、実のところベートーヴェンの専売特許ではない。ベートーヴェン自身、優れた同僚音楽家として認めていたケルビーニ（1760-1842）もその 1 人。特に 1800 年にパリで初演された**歌劇《水の運搬人》**（《二日間》という題名でもある）は、理不尽な罪で捕らわれの身となった主人公が、最後は正義の力によって解放されるという内容だ。

そうした世界観やそれにふさわしい楽曲のあり方を、ベートーヴェンも《第九》をはじめとする諸作品に積極的に採り入れていく。となると、その崇拝者であり後継者であることを強烈に自認していたワーグナー自身が、ベートーヴェンの音楽世界を、自らの作品に取り入れていったのは当然だろう。特に、畢生の大作である楽劇《ニーベルングの指環》の最後を飾る**《神々の黄昏》**（作曲は 1869 年から 74 年にかけてだが、作品そのものの草案は 1848 年にまで遡る）では、その大詰めで英雄ジークフリートが死を迎える中、悲劇的であると同時に輝かしさにも満ちた**葬送行進曲**が出現する。

ところでベートーヴェンの創作過程には、《第九》作曲以前から、その萌芽となる動きを見ることができる、1808 年に作られた**《合唱幻想曲》**（原題は《ピアノ、合唱、オーケストラのための幻想曲》）もその 1 つで、深刻な曲想の後に《第九》の象徴ともいえる「歓喜に寄す」に似たテーマが現れる点、最後に声楽が用いられる点において、《第九》の先駆けともいえる（さらに「歓喜に寄す」に似たテーマは、1794 年あるいは 95 年に作曲された声楽曲《愛されざる男のため息——応える愛》の後半部分にも登場する）。

歌詞の出典については色々議論されてきたが、最近では、ベートーヴェンと同時代にウィーンで活躍していた詩人クフナー（1780-1846）によることがほぼ確定している。音楽による調和の世界を描いたその内容も、まさしく《第九》につながるものだ。

【第Ⅱ部 堪えるのだよりよい世界のために——保守反動時代の矛盾と混迷】

解説：小宮正安

《第九》という呼称で知られるベートーヴェンの《交響曲第9番》。その成立に関しては紆余曲折があり、1815年頃にスケッチ帳に萌芽が現れた後、1817年にロンドンのフィルハーモニック協会から新作交響曲を委嘱され、実際の作曲が始まる。ただし、同時期に大作《ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）》の作曲に取り組んでいたこともあり、曲作りが本格化したのは1822年以降であり、全曲が完成したのは1824年のことだった。そして同年5月7日、彼の本拠地であったウィーンのケルトナー門劇場で初演がおこなわれた。

いずれにしても《第九》は、器楽曲であるはずの交響曲に声楽が導入されている点も含め、空前絶後、演奏至難の作品だった。それをある意味逆手にとり、ピアノ用に編曲したのが、ベートーヴェンの弟子であり、また名ピアニストでもあったチェルニー（1791-1857）。彼が1829年に出版した《第九》のピアノ連弾版は、オリジナルの音響世界をあえて切り詰めた編成に置き換えることで生まれる、独自のエネルギーや躍動感を宿したものとなっている。中でも本日取り上げる**第2楽章**は、《第九》初演の際にアンコールがおこなわれたほどの人気を誇った。しかもその要因が、フランス革命に熱狂する一方で、革命自体の行き詰まりと引き換えに台頭した保守反動体制に従わざるを得なかった当時の人々の不満に訴えかけるものだった、という見方もある。

たしかに1789年にフランス革命が勃発してからしばらくすると、革命自体が混乱に陥り、血で血を洗う内輪争いに憂慮を示す人々も出てきた。詩人のシラー（1759-1805）もその1人で、彼が1799年に書いた**《鐘の歌》**は、革命後に市民がよりよい社会をいかに構築すべきかがテーマになっている。それに大きく影響されたのが、ベートーヴェンとも親交のあったロンベルク（1767-1821）。彼が1809年に作曲した同名の作品は、独唱、合唱、管弦楽が織りなす長大な作品で、大勢の市民が声を合わせ、音楽を通じて来るべき理想世界を構築しようとする「合唱バラード」（《合唱幻想曲》や《第九》もその一ジャンルと考えられる）となっている。

やがて保守反動体制がヨーロッパ中に敷かれる中、特にその牙城となったウィーンでは、イタリア出身のロッシーニ（1792-1868）の歌劇が大人気となった。そうした状況の中、家庭をはじめ様々な場所でロッシーニの歌劇を楽しめるよう編曲物の楽譜も出版されてゆく。1822年から23年にかけて作曲された**歌劇《セミラーミデ》序曲**を、チェルニーがピアノ連弾用に編曲したバージョンもその1つである。

《第九》は、その空前絶後のスケールゆえ、弦楽四重奏等の室内楽編成に交響曲を編曲して家庭で楽しむという当時の演奏スタイルとは、一線を画す存在だった。結果、弦楽器を伴う編曲版が非常に少なかったのだが、19世紀後半になるとその傾向も緩み始める。ポヘミア出身のヴァイオリニストであるジット（1850-1922）によるヴァイオリンとピアノ

のための編曲版もその1つで、本日はその中から限らない歌心と平安に満ちた**第3楽章**が演奏される。

【第Ⅲ部 星の輝く天幕の彼方に その方を探せ——理想世界の希求と探求】

解説：小宮正安

《第九》という呼称で知られるベートーヴェンの《交響曲 第9番》。その成立に関しては紆余曲折があり、1815年頃にスケッチ帳に萌芽が現れた後、1817年にロンドンのフィルハーモニック協会から新作交響曲を委嘱され、実際の作曲が始まる。ただし、同時期に大作《ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）》の作曲に取り組んでいたこともあり、曲作りが本格化したのは1822年以降であり、全曲が完成したのは1824年のことだった。そして同年5月7日、彼の本拠地であったウィーンのケルトナー門劇場で初演がおこなわれた。

いずれにしても《第九》は、器楽曲であるはずの交響曲に声楽が導入されている点も含め、空前絶後、演奏至難の作品だった。ただし、その声楽部分の中心を成すいわゆる「喜びの歌」の旋律は徐々に広まり、やがて《第九》、さらには理想世界の探究者としてのベートーヴェンの代名詞とでもいふべき存在へと変容を遂げていく。

「喜びの歌」のそのままの旋律がベートーヴェンの作品に登場するのは、1811年に書かれた**劇付随音楽《シュテファン王》序曲**。シュテファン王とは、ハンガリーの初代国王イシュトヴァーン1世（969-1038）のことで、劇の筋書も、様々な苦闘を経ながらハンガリーの建国を成し遂げていく彼の歩みを描いたものとなっている。「喜びの歌」の基となったテキストは、シラー（1759-1805）が1785年に書いた頌歌「**歓喜に寄す**」（彼の死後に改訂版も出版された）である。若き日のベートーヴェンがこの作品に魅了されたことは有名だが、彼が《第九》を作るはるか前から「歓喜に寄す」には様々な人々（その中には、ツェルター〈1758-1832〉、シューベルト〈1797-1828〉、ネーゲリ〈1773-1836〉など、ベートーヴェンの同時代にドイツ語圏で活躍した作曲家が多数含まれる）が曲を付けており、中にはフランスの革命歌《ラ・マルセイエーズ》を彷彿させるものもある。

幼い頃にベートーヴェンに会い、その未来を囑望されたという「伝説、のあるリスト（1811-86）も、彼の崇拝者だった。そんな彼は、ベートーヴェンの故郷ボンに1845年に記念像が建立されるにあたり、その資金集めに奔走した。さらに、声楽と管弦楽という編成としては、彼にとって初となる《**ボンのベートーヴェン・カンタータ**》を作曲。それからほどなくして、そのハイライトも**ピアノ小品**として出版されている。

なお「喜びの歌」の旋律そのものは、ベートーヴェン以外の作曲家の作品にも聴くことができる。例えば1775年、モーツァルト（1756-91）がミュンヘンでの演奏旅行中に作った宗教曲《**主の御慈悲みを**》もその1つ。歌声を合わせて神を讃えるというその内容は、歓喜を歌声で賛美する「喜びの歌」の世界ときわめて近いところにある（なおモーツァルトのこの作品は、ベートーヴェンの生前に既に楽譜として出版されていた）。

リストは、有名ピアニストとして活躍していたこともあり、《第九》をピアノだけで演奏する編曲作業にも力を注いだ。1851年に編曲がおこなわれた2台ピアノ用、さらに

1865年に完成された独奏ピアノ用のバージョンは、その結晶に他ならない。本日はその中から、あえて声楽部分もピアノに置き換えた**第4楽章**が取り上げられる。